

飼育員の野添さん

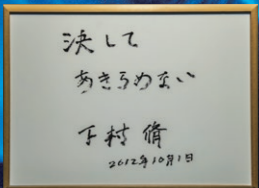
**水** 中をふわりふわりと漂うクラゲたち。その独特の動きは、見る者を飽きさせない。佐世保市にある「十九島水族館海きらら」のクラゲシンフォニードームでは、九十九島周辺に生息しているクラゲが展示されている。世界には約三千種、日本には約四百種のクラゲがいるそう、九十九島周辺では百種類以上が確認されているという。幻想的なドームでは、そのうちの十一種類のクラゲを展示。光に照らされ、優雅に泳ぐクラゲの姿は神秘的で、時間を忘れてしまう。

施設内には学びの空間である「クラゲ研究室」もあり、こちらでは繁殖に力を入れているという。大きなビーカーの中で泳ぐクラゲの赤ちゃんを見せてもらったものの、目を凝らさないと、どこにいても分らないほど小さい。飼育員の野添裕一さんは「クラゲの赤ちゃんは一ミリ以下で生まれてくるものもあり、見つけるのが大変なんです」と笑う。クラゲは短いもので卵から三〜四カ月、長いものは一年以上をかけて成体になるが、クラゲの種類によつて赤ちゃんの大きさも育て方も異なるという。「生まれたばかりの赤ちゃんの管理は難しく、毎日行う水替えては、赤ちゃんをスポイトで一匹ずつ吸い上げることもあります」。並んでいるビーカーの数を見ると、その作業がとてつもなく大変なことが分かる。

野添さんはクラゲ飼育歴八年。「クラゲは分かっていることが多いんですよ。例えば、どこで暮らし、何を食べているか、そんな基本的なことも分かっているクラゲがたくさんいます。不思議が尽きないのがクラゲの魅力です」。

海きららでは、これまでに新種の発見もあった。その一つが「ワタゲクラゲ」。触手がワタゲのようにフワフワとしていることから、この名が付けられたという。ここだけで見られる貴重なクラゲだ。「一口に『クラゲ』と言っても、色や形はさまざま。光るもの、毒を持つもの持たないもの、多種多様です。来館者の皆さんには、まずはいろんな種類のクラゲがいるということを知っていただきたいですね」と野添さん。中には成体の寿命が数時間というクラゲもいるという。不思議さ全開の生き物・クラゲ。その世界をぜひ楽しんでほしい。

研究室の一角にはノーベル賞受賞者で、海きららの名誉館長であった長崎県出身の故下村脩博士の功績を紹介するコーナーが設けられている。博士は光るオワンクラゲから発光物質を発見し、生命科学の発展に大きく貢献。長崎県名誉県民と佐世保市名誉市民の称号も贈られている。



下村博士から海きららへ贈られた言葉

# クラゲ

水中を漂う神秘的な姿に癒される。

ウツクラゲ

ウツクラゲ